

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：25302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02432

研究課題名(和文)戦後の保育所「若竹の園」にみる幼保一体化カリキュラム・保育実践に関する歴史的研究

研究課題名(英文)The Historical Study of Curriculum and Practice for The Integrated System of Early Childhood Education and Care in Wakatakenosono Nursery School after World War2

研究代表者

高月 教恵 (takatsuki, norie)

新見公立大学・健康科学部・名誉教授

研究者番号：40270011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「子どもの養育の社会化」における今日の課題に応えるために、幼保一体化における統一した保育実践をふまえたカリキュラム構築のための予備的研究である。戦後の保育所「若竹の園」および奈良女子大学附属幼稚園の資料を整理分析して、子ども観・子育て観を明らかにするとともに、保育実践を具体的に描き出してその特質を解明した。そして、近年の保育実践研究(現職研修)を整理、分析して、保育所・幼稚園が求めている保育実践を明らかにして、幼保一体化カリキュラム、実践モデルを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の乳幼児保育史研究は、著しく遅れている。本研究は、戦後の日本の保育所、幼稚園、保育実践研究の資料を調査・収集・整理し、実証的に明らかにしたものであり、今後の乳幼児保育史研究の重要な基礎的資料として提供できる。

保育現場は、行政側の保育政策に対して、幼保一体化における保育実践のあり方・カリキュラムに戸惑いを感じている。さらに、保育の場は保育所、幼稚園、認定こども園に限らず地域型保育にまで広がりをみせ、保育の質の低下が懸念される。また、社会の変化にともなって気になる子どもが増えている実態がある。本研究は、幼保一体化カリキュラム・保育の質を保障する保育実践に重要な示唆を与えることができる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is a preliminary research to construct a curriculum for the integrated system of early childhood education and care based on practice with responding to the current agenda of "socialization of child care". This study clarifies the view of children and actual practices through analyzing the diaries and documents of both Wakatakenosono nursery school and Kindergarten Attached to Nara Women's University after World War . And, this study also indicates what nursery schools and Kindergartens are searching for at the current practice by analyzing the studies on daily practice and teacher training, presents models for integrated early childhood education and care curriculum and practices.

研究分野：教育学

キーワード：幼保一体化カリキュラム 戦後の子ども観・子育て観 戦後の保育所保育実践・カリキュラム 戦後の幼稚園保育実践・カリキュラム 保育所「若竹の園」 奈良女子大学附属幼稚園 近年の保育実践研究(現職研修) インクルーシブ保育・教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

21世紀になった今日、女性の就労と少子化が進み、保育(子育て)の社会化が強く求められている。2017(平成29)年3月に、保育所保育指針・幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂され、保育所・幼稚園・認定こども園においては、0歳児から就学前までの子どもの教育・保育を一貫したものとしてとらえることが求められている。

一方、待機児童の増大にともなう、保育の場は、保育所、幼稚園、認定こども園に限らず地域型保育(小規模保育・家庭的保育・居宅型保育・事業所保育)にまで広がりをみせている。さらに、2019(令和1)年10月から保育の利用料の無償化が始まり、ますますの待機児童の増大と、保育の質の低下が懸念される。また、社会の変化にともなう気になる子ども(境界線上の子どもを含む)が在園児の半数をしめるという実態がある。

これらのことから、保育の質を保障する幼保一体化カリキュラムと実践モデルの提示は喫緊の課題である。

本研究の対象園である保育所「若竹の園」(岡山県倉敷市)は、石井十次を物心両面で支えた大原孫三郎(倉敷紡績社長、1880~1943)と大原壽恵子(孫三郎妻、1883~1930)によって、1925(大正14)年3月に幼保一体化施設(2・3歳児:託児所、4・5歳児:幼稚園)として創設された保育所である。1925年という早い時期に、いち早く「養育の社会化」の問題に取り組み、子どもの人権を認めて「育つ」ための環境を整備し、実践し、今日まで継続させてきた保育所「若竹の園」を、その長い歴史とともに捉え直すことは、保育の質を保障する保育実践・カリキュラムの構築に重要な示唆を与えることができると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次のとおりである。

- (1) 戦後の保育所・幼稚園の子ども観・子育て観の違いをどう統一的に捉えるかについて文献を中心に研究し、幼保一体化カリキュラムの促進要因を検証する。
- (2) 戦後の保育所(若竹の園)、幼稚園(奈良女子大学附属幼稚園)の質的調査から、幼保一体化カリキュラムを促進する要因を検証する。
- (3) 岡山県、広島県の近年の保育実践研究(現職研修)から、保育現場の課題を明らかにし、一般保育現場がもめている保育実践、カリキュラムについて考察する。
以上の歴史的、実証的研究をふまえて、幼保一体化カリキュラム・保育実践モデルを提示する。

3. 研究の方法

戦後の乳幼児保育史関係の資料調査、収集をして、次のとおり研究を進めた。

- (1) 戦後の子ども観(子育て観)に関する研究
- (2) 戦後の保育実践に関する研究
保育所「若竹の園」におけるカリキュラム、保育実践(内容・方法)に関する研究
奈良女子大学附属幼稚園におけるカリキュラム、保育実践(内容・方法)に関する研究
- (3) 近年の保育現場における現職研修、カリキュラム、保育実践(内容・方法)に関する研究

4. 研究成果

主な研究成果は以下のとおりである。

- (1) 戦後の子ども観(子育て観)に関する研究
戦後の保育制度変遷にともなう子ども観(子育て観)について、文献を中心に整理し、考察した。

戦後の保育所「若竹の園」における子ども観(子育て観)に関する研究

戦後の保育所{若竹の園}の子ども観(子育て観)について、戦前は保育所「若竹の園」の経営母体であった「倉敷さつき会」(会長大原壽恵子後、原長・大原眞佐子を会長とする婦人団体)は、戦後、児童福祉法の制定によって直接保育所経営に関わることはなくなったが、創設期の意思「働く母親の人権(労働権)と“子どもの最善の利益”を保障して、“保育所・家庭・地域が連携して子どもを育てる(養育の社会化)”」は、令和になった現在まで引き継がれ、会長はじめ会員は、修養向上に努め、「若竹の園」を支え続けている。そのことによって、「若竹の園」初代園長大原壽恵子(倉敷さつき会初代会長)の子ども観「子どもはすべからく神様からいただいたみ子なのであり、いかなる子ども的人格をも尊重しなければならない」は、開園当初から現在まで引き継がれていることが明らかになった。

戦後の奈良女子大学附属幼稚園における子ども観（子育て観）に関する研究

戦後の奈良女子大学附属幼稚園の子ども観（子育て観）について、戦後の教育課程の変遷（戦後～昭和36年）から考察した結果、幼稚園では、家庭での養育を基盤にして、家庭との連絡を大切にして、子どもは自ら育とうとする力をもっているとして、子どもの姿をしっかりと捉えて（観察記録）、子どもの主体性を尊重して保育、教育（昭和29年～）していることが明らかになった。

(2) 戦後の保育実践に関する研究

保育所「若竹の園」におけるカリキュラム、保育実践（内容・方法）に関する研究

戦後の保育所「若竹の園」の保育実践に関する資料がほとんど残っていないことと、コロナ禍で資料調査、収集が困難であったため、保育実践について十分研究できなかった。しかし、「倉敷さつき会」の戦後の活動内容から、「若竹の園」の開園当初の理念「子どもの育つ権利を認め、育つための環境を整えて、一人一人の人格を尊重して育てる」は、今も変わることなく引き継がれて実践されていることが明らかになった。

このことから、「倉敷さつき会」は「若竹の園」の保育の質を保障してきたといえる。しかし、「倉敷さつき会」会員の高齢化により会員数は減少し、女性の生き方が「家を守り、社会に奉仕することが美德」とされた時代から、この少子化と女性の人権保障から「女性が社会で働く」ひいては「女性が働かなければ社会の経済は成り立たない」時代へとパラダイムチェンジをした。今後、「倉敷さつき会」をどのようにして存続させるかは大きな課題である。それを解決することは、「若竹の園」の問題だけでなく、日本の保育の質保障のあり方に示唆を与えるものと考えられる。

奈良女子大学附属幼稚園におけるカリキュラム、保育実践（内容・方法）に関する研究

昭和24年度試案「保育計画」(その基礎)(一)(年間指導計画)では、戦前の教科的色彩の強い5項目を中心とした保育から、幼児の生活経験を中心とした保育へ転換して、「保育要領」(文部省、昭和23年)に学び、学校教育法(昭和22年)第23条の幼稚園の目標に向かって円満な発達するにはどうすればよいかを考えて保育していた。保育計画では、まず月々の保育主題を決めて保育の方向性を明らかにし、保育内容を「自由遊び、ごっこ遊び、見学観察、言語、音楽・体育、絵画、製作、集団生活、健康、安全、年中行事、家庭との連絡」として、幼児の生活に基づいて、今までの保育を見直して組織化し、保育を実践していたことが明らかになった。

「月別指導計画」(昭和24年度～昭和26年度)では、まず主題と目標を定めて保育の方向性を具体的に示し、生活の展開、補導の着眼点、生活内容、家庭との連絡、評価の視点から保育をとらえ、保育内容を「保健、集団生活、見学観察、表現(言語、音楽リズム、絵画製作)、年中行事」として組織化して実践していたことが明らかになった。

昭和29年「幼稚園の教育計画」では、幼稚園の経験を、生活から教育に焦点をあわせて見直し、先の「保育計画」・「月別保育計画」を省察し、単元を中心に秩序づけて組織化して改訂した。まず、当園の具体的な教育目標を定め、育成する子どもの姿(1.活々とした強く明るい幼児 2.美しく温かいこゝろの幼児)を明確にし、年間の単元表(行事含む)を作成し、健康教育、生活指導について別途計画をたて、実践した。年間単元表は、「月・行事・予定日数・目標・予想される活動」である。単元を中心にしたことについては、当時奈良女子高等師範学校附属小学校で実践されていた教育形態(しごと・けいこ・なかよし)を見据えて幼小連携を考えていたことが明らかになった。また、リズム合奏の指導、幼児の劇遊び等が取り上げられていることから、集団活動も重視していた。3才児の保育については、観察記録が添えられていることから、子どもの姿をしっかりとらえて保育実践していたことが明らかになった。

昭和36年「幼稚園教育 指導計画2年保育4才・5才」・「3才児の幼稚園教育」では、教育目標について、昭和29年「幼稚園の教育計画」では教育目標決定後に子どもの姿を念願したのに対して、まず理想とする子どもの姿をかかげてから教育目標を決定している。そして、今まで以上に指導計画の必要性が重視され、昭和29年の単元活動を引き継ぎながら、幼稚園教育要領が出されたのを機会に、幼稚園教育要領の望ましい経験を年齢別、具体化、経験の追加の観点から見直して望ましい経験分析表を作成し、ついで6領域別指導系列表を作成して、これにそえて教育資料表(童話、劇、紙芝居、幻燈、歌、レコード)を作成した。そして、それらをふまえて、昭和29年「幼稚園の教育計画」では単元展開の計画表のみであったが、昭和36年では、幼児の幼稚園生活全域にわたって見直して、4・5才児の場合は、当園で実践している単元活動・集団経験・自由遊び・日常生活・年間行事を集成して年間指導計画(月案)を作成した。3才児の場合、1学期は、幼稚園生活を主題活動・日常生活についての月の指導計画をたて、2学期からは、4・5才児の指導計画と同様に、主題活動・集団経験・自由遊び及び日常生活の年間計画(月案)を作成した。さらに、4・5才児の場合は、指導計画実施記録として実践記録を掲載し、3才児の場合は、指導事例(期間・題材をとりあげた趣旨および目標・活動の日程・指導経過・反省)を記し、指導経過において、子どもの観察記録と教師のかかわり方の実践記録を掲載している。このことから、各々の活動において子どもの姿をしっかりと観察して、子どもの主体性を尊重して

保育実践していたことが明らかになった。観察記録については、当園教諭大橋和子が IFEL(1950年～1951年教育指導者講習)5回生として講習に参加し、IFEL講師ルイスから学び、園内でその重要性が認識されていたと考えられる。

IFEL6回生であり、昭和31(1956)年の幼稚園教育要領策定の一人であった角尾稔(東京学芸大学)は、「昭和31年の幼稚園教育要領は6領域(教科)を定めて小学校教育との一貫性を図ろうとした。これはまさに IFEL 講師ルイスの幼年教育の考え方によるものである。しかし、それは失敗した。まさに今(現在)またその時がきた。先の教訓を生かして幼小連携を考え、実践されることを願う」という言葉を残している。幼小連携がなぜ失敗したかは、今後の教育課程の変遷、保育実践を研究することによって、その要因が明らかになると考える。ひいては、そのことが、今の幼小連携のあり方に示唆を与えるものと考ええる。

(3)近年の保育現場における現職研修、カリキュラム、保育実践(内容・方法)に関する研究

広島県尾道市立因島南認定こども園の園内研修(実践研究)に加わり、保育教諭とカリキュラムを作成し、公開保育において保育実践モデルを提示した(2020年)。

広島県福山市学校法人千鶴幼稚園の園内研修(実践研究)に加わり、幼稚園教諭とカリキュラムを作成し、公開保育において保育実践モデルを提示した(2020年)。

岡山県新見市立保育所・幼稚園・認定こども園の全保育者80名と「新見市保育・教育カリキュラム」(A4版111頁)を作成し、発行した(2021年)。

さらに、「子どもの育ちを保障するー新見市保育・教育カリキュラムを通して育む保育者の資質」について、令和5年度岡山県保育研究大会で発表し、参加者(岡山県保育所・認定こども園保育者)に、「新見市保育・教育カリキュラム」を提示した(2024年)。

2008年から福山市立女子短期大学附属幼稚園の保育実践研究に関わり、以後、福山市立大学附属幼稚園から福山市立大学附属認定こども園に至るまで園内研修に加わり、公開保育において、保育実践モデルを提示した(2022年)。

共同研究者2名とインクルーシブ教育・保育について話し合い、NIU新見公立大学西サテライトに、「ひだまりのいえ」(新見公立大学教育支援センター教育実践部)を開設し(2023年4月28日)就学前の気になる子どもの援助・支援をしながらインクルーシブ教育・保育について研究し、学生たちに提示している。新見市の保育者にも提示する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 高月教恵	4. 巻 43
2. 論文標題 倉敷さつき會100年の歴史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 新見公立大学紀要	6. 最初と最後の頁 29 - 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高月教恵	4. 巻 1
2. 論文標題 短期大学・福山市立大学附属幼稚園から福山市立大学附属こども園へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福山市立大学附属こども園研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高月教恵	4. 巻 41
2. 論文標題 戦後のIFEL（教育指導者講習会）幼稚園教育班の実際 - 大橋和子の受講ノートを中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新見公立大学紀要	6. 最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 柳沢卓, 飯島貴子, 松島英恵, 高月教恵	4. 巻 16
2. 論文標題 翻刻「昭和24年度試案 保育計画(一)」奈良女子大学奈良女子高等師範学校附属幼稚園	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育システム研究	6. 最初と最後の頁 153-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 丹治敬之, 井上知洋, 茂木成友, 高橋彩	4. 巻 29(4)
2. 論文標題 年少から年長幼児におけるかな読みと音韻意識の関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 LD研究	6. 最初と最後の頁 245-257
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高月教恵
2. 発表標題 戦後の教育課程の変遷(2) - 昭和30年代の奈良女子大学附属幼稚園を中心にー
3. 学会等名 第74回日本保育学会(オンライン).
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高月教恵
2. 発表標題 子どもの姿をとらえるカリキュラムとは
3. 学会等名 広島県教育委員会「子どもの姿をとらえる!カリキュラム」研修会(web)(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高月教恵
2. 発表標題 保育所「若竹の園」倉敷さつき会100年の歴史
3. 学会等名 第73回日本保育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高月教恵
2. 発表標題 指導計画と実践をつなぐ
3. 学会等名 広島県幼児教育アドバイザー等協議会（web）によるオンライン研修会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 立浪朋子
2. 発表標題 戦前期感化院の子どもにおける学力の状態 石川県の感化院を事例に
3. 学会等名 日本福祉心理学会第18回大会，指導計画と実践をつなぐ，広島県教育委員会乳幼児教育支援センター，広島県福山庁舎（オンライン）発表
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 高月教恵	4. 発行年 2022年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 10
3. 書名 児童・家庭福祉	

1. 著者名 高橋彩	4. 発行年 2023年
2. 出版社 培風館	5. 総ページ数 9
3. 書名 特別支援教育・インクルーシブ教育のかたち	

1. 著者名 立浪朋子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大学教育出版	5. 総ページ数 7
3. 書名 新しい支援からの教育社会学—人間形成論の視点から—	

1. 著者名 高月教恵、小藤信子、上田博文、太田好江、清水里香他80名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新見市・新見市教育委員会	5. 総ページ数 111
3. 書名 新見市保育・教育カリキュラム	

1. 著者名 高橋彩	4. 発行年 2022年
2. 出版社 建帛社	5. 総ページ数 1
3. 書名 コンパス教育相談	

1. 著者名 立浪朋子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 建帛社	5. 総ページ数 1
3. 書名 コンパス教育相談	

1. 著者名 高月教恵	4. 発行年 2020年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 10
3. 書名 児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度〔第4版〕	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高橋 彩 (takahashi ayaka) (10845449)	新見公立大学・健康科学部・講師 (25302)	
研究分担者	立浪 朋子 (tachinami tomoko) (30845392)	新見公立大学・健康科学部・講師 (25302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------